# 日本英文学会東北支部

## 第 80 回大会資料

### 共催：国立大学法人 東北大学大学院文学研究科

時：2025 年 11 月 29 日（土）
所：東北大学川内南キャンパス 文科系総合講義棟
（宮城県仙台市青葉区川内 27 番 1 号）

**日本英文学会東北支部事務局**
〒990-8560 山形県山形市小白川町一丁目 4-12
山形大学 地域教育文化学部 三枝和彦研究室内
電話：023-628-4827／E-mail：tohoku@elsj.org

# 第 80 回大会懇親会のご案内

第 80 回大会懇親会を下記の通り開催いたします。お申し込みにつきましては、9 月下旬に支部会員宛に別途ご案内申し上げます。なお、参加をご希望の方は必ず事前にお申し込みください。

【日時】　2025 年 11 月 29 日（土）午後 7 時〜9 時

【場所】　イタリアンレストラン チロル仙台店（宮城県仙台市青葉区中央 2-6-6 多楽茶屋ビル B1）

# 日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

## 2025 年度　大会役員一覧

（敬称略・五十音順）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 支部長 | 大貫 隆史 | | |
| 副支部長 | 福士 航 | | |
| 理事 | 井出 達郎 | 大貫 隆史 | 川田 潤 |
| | 木村 宣美 | 三枝 和彦 | 酒井 祐輔 |
| | 境野 直樹 | 佐々木 和貴 | 島 越郎 |
| | 髙田 英和 | 福士 航 | |
| 大会準備委員 | 泉 順子 | 戸塚 将 | 土屋 陽子 |
| | 柳澤 國雄 | 山口 晋平 | |
| 開催校委員 | 飯味 千秋 | | |
| 事務局 | 三枝 和彦（事務局長） | | 齋藤 章吾（事務局長補佐） |
| | 佐藤 元樹（事務局員） | | |

# 日本英文学会東北支部第 80 回大会プログラム

## 共催：国立大学法人 東北大学大学院文学研究科

時：2025 年 11 月 29 日（土）
所：東北大学川内南キャンパス 文科系総合講義棟
（宮城県仙台市青葉区川内 27 番 1 号）

**理事会** 11 時 00 分より（第 2 小講義室）
**開会式** 12 時 30 分より（第 2 小講義室）

□開会の辞・支部長談話　　日本英文学会東北支部長　大 貫　隆 史

### 研究発表

第 1 発表　13:00 － 13:30　　第 2 発表　13:30 － 14:00
第 3 発表　14:05 － 14:35　　第 4 発表　14:35 － 15:05

**文学部門**（第 2 小講義室）

1. 【発表なし】

---

司会　仙台青葉学院短期大学准教授　相 田　明 子

2. 「超然」と「関与」のあいだを揺らぐ Lucy Snowe
——Charlotte Brontë, *Villette* と、そこにせめぎあう情動的なもの

東北大学大学院　斉 藤　宥 哉

---

司会　弘前大学准教授　土 屋　陽 子

3. 月を目指して語る ——Paul Auster の *Moon Palace* における「語り」と他者

東北大学大学院　大 塚　裕 介

---

司会　仙台大学教授　鎌 田　幸 雄

4. “The Legend of Dido”の感情表象 ——emotion／affect の視座から

宮城大学准教授　金 井　典 子

## 英語学・英語教育部門（第 3 小講義室）

司会　旭川医科大学講師　柳 澤　國 雄

1. 関係副詞 where と共起する名詞について

代表発表者　福島大学　照 井　正 樹

共同発表者　福島大学准教授　佐 藤　元 樹

2. Thetic／Categorical Judgement の構造

東北大学大学院　坂 本　瑞 生

---

司会　宮城教育大学准教授　戸 塚　　将

3. no matter DP の指定文省略分析

福島大学准教授　佐 藤　元 樹

4. 一致と意味の相関：非名詞句主語の一致について

福井大学講師　廣 川　貴 朗

## SYMPOSIA（15:15 － 17:30）

## 文学部門（第 2 小講義室）

イギリス・ユートピア小説再考

| | | |
|---|---|---|
| 司会・講師 | 東北学院大学教授 | 泉　順 子 |
| 講師 | 福島大学教授 | 川 田　潤 |
| 講師 | 法政大学准教授 | 小 澤　央 |
| 講師 | フェリス女学院大学非常勤講師 | 玉川 明日美 |

---

## 英語学・英語教育部門（第 3 小講義室）

On Merge and Its Theoretical Issues

| | | |
|---|---|---|
| 司会・講師 | 宮城教育大学准教授 | 戸 塚　　将 |
| 講師 | 元東北学院大学教授 | 阿 部　潤 |
| 講師 | 明治大学教授 | 石 井　透 |
| 講師 | 東洋大学教授 | 後 藤　亘 |
| コメンテーター | 横浜国立大学非常勤講師 | 宗 像　孝 |

# 研　究　発　表

## 文 学 部 門

司会　仙台青葉学院短期大学准教授　　相 田　明 子

### 「超然」と「関与」のあいだを揺らぐ Lucy Snowe
### ——Charlotte Brontë, *Villette* と、そこにせめぎあう情動的なもの

東北大学大学院　　斉 藤　宥 哉

Charlotte Brontë, *Villette*（1853）において、一人称の語り手である Lucy Snowe は、徹底した社交への無関心と、ときどき垣間見える進取の気性を、奇妙なかたちで、小説のなかに同居させている。そこで、ルーシーが、いわば「超然」と「関与」のあいだを行きつ戻りつするのには、情動がかかわっている、とはいえないだろうか。すなわち、ヘーゲル的な自己疎外を経験することでしか到達しえない精神段階というものへの礼賛と、そうして社交を絶ち内面に没入していくことは、やはり危険をはらんでいるという警告とが、書き手の、ひいてはルーシーの情動的なものとして、綯い交ぜになっているのではないだろうか。さらに、ルーシーがかかえる矛盾のうち、情動という概念ではうまくとらえられないものも、クリステヴァの精神分析理論を補助線としたとき、その核心がみえてくるように思われる。本報告は、*Villette* における語りの問題を手放すことなく、ルーシーの人物造型に理論的説明をあたえる試みである。

司会　弘前大学准教授　　土 屋　陽 子

### 月を目指して語る ——Paul Auster の *Moon Palace* における「語り」と他者

東北大学大学院　　大 塚　裕 介

本発表では、まず Paul Auster の自伝的小説でありエッセイでもある *The Invention of Solitude*（1982）を検証することで、彼のポストモダニティについて考察する。それを下地とし、*Moon Palace*（1989）において、「主人公兼語り手であるフォッグがいかにして成長しているか」を分析していく。本研究では主にフォッグの「語り」に注目する。この小説において、フォッグは「語り手」でありながら、他者の物語の「聴き手」でもある。半ば受け身の立場を余儀なくされるフォッグの成長を説明するためには、「語ること」を通じて、主人公フォッグと他者との関係がいかに構築されているかを検討する必要がある。その過程において、フォッグが主体性を獲得していく様子を、フォッグの「語り」を手掛かりに記述していく。結論として、ポストモダニティと人間の主体性に関する問題について、Paul Auster の作品における他者との関係性及び「語り」の視点から考察していく。

司会　仙台大学教授　　鎌 田　幸 雄

## “The Legend of Dido”の感情表象 ――emotion／affect の視座から

宮城大学准教授　　金 井　典 子

本発表は、Geoffrey Chaucer 作 *The Legend of Good Women* の“The Legend of Dido”を扱い、emotion／affect の観点から、本作の感情表象の構造を再検討するものである。議論にあたっては、Brian Massumi および Sara Ahmed の感情理論、あわせて Corinne Saunders による中世的感情の解釈を参照する。*LGW* の語り手は、女性蔑視的な過去の創作に対する贖罪の使命のもとで Aeneas と Dido の物語を再話する。語り手は、“pity” “sorrow” “sily” といった感情語を用いて読者の共感を Dido に向け、倫理的判断へと導こうとする。一方で、恋人に裏切られた Dido の悲哀と死をめぐる場面には、衣への口づけや気絶の反復、語りの途切れといった描写が現れ、言語化以前の感覚としての affect を読み取ることができる。本発表では、このような emotion と affect の共存を示しその解釈を行う。この試みが、中世文学における感情表象の再読への視座となり得ることを期待する。

# 英語学・英語教育部門

司会　旭川医科大学講師　　柳 澤　國 雄

## 関係副詞 where と共起する名詞について

代表発表者　　福島大学　　照 井　正 樹
共同発表者　福島大学准教授　　佐 藤　元 樹

本発表では、関係副詞 where が「場所」を表す名詞と共起するとされてきた従来の規範的規則に対し、コーパスとインフォーマント調査を通じて、その共起する名詞の範囲が拡張していることを論じる。住吉（2023）は、関係副詞 where が「場所」に限らず、「時」を表す名詞や抽象名詞をその先行詞とすることを指摘している。本発表では、規範から外れているように見える where の逸脱的用法が、住吉（2003）の指摘している（非）制限関係節用法だけではなく、自由関係節用法においても観察されることを示す。関係副詞 where の自由関係節では、先行詞が文法上表にあらわれないが、意味的には文脈から補って解釈される。本発表では、S is [where…]のタイプの文を用いて、where の自由関係節が広範な名詞を意味上の先行詞にとり得ることを示し、関係副詞 where が従来考えられていたよりも柔軟でかつ拡張的であることを論じる。

## Thetic／Categorical Judgement の構造

東北大学大学院　　坂 本　瑞 生

事態の存在を述べる単独判断（e.g. 犬が走る）と、ある対象の存在を認識して属性を述べ立てる複合判断（e.g. 犬は走る）の区別は、日本語においては助詞「が」「は」に反映される（Kuroda (1972) など）。他方、英語の場合は形態統語的標識ではなく韻律に判断の違いが反映されるとされてきた（Sasse (1978) ）。しかし、形態統語

構造を介さずに意味と音が結びつくならば、英語は Y モデルへの反例を提起することになる。本発表では、複合判断の主語は IP 指定部に、単独判断の主語は vP 内部に位置する、という構造的違いが英語における判断の違いを表示すると提案する。この構造の違いに基づいて、①強勢付与、②NPI 認可のための再構築効果、③文副詞の挿入位置、などの現象について、複合判断と単一判断の間で見られる現象上の振る舞いの相違に統一的な説明を与える。

司会　宮城教育大学准教授　　戸　塚　　将

## no matter DP の指定文省略分析

福島大学准教授　　佐 藤　元 樹

本発表では、no matter the time のように、no matter の直後に名詞句が続く譲歩節の意味とその構造について論じる。no matter DP 用法における興味深い文法的特徴は、その DP が意味的には潜伏疑問を表す一方で、統語的には補部の選択制限の違反が起きていることである。文法的には、名詞（matter）の補部に節ではなく、名詞句が選択されることは規範的ではない。本発表では、no matter が示す脱規範的用法を節の部分的省略によって解決することを試みる。具体的には、no matter の補部に指定疑問文（specificational question）の構造を仮定し、疑問詞と be 動詞を省略することによって、no matter DP を派生する分析を提案する。この指定文省略分析により、no matter DP が示す範疇選択の違反と DP が示す諸特性が特別な仮定をせずに説明されることを論じる。

## 一致と意味の相関：非名詞句主語の一致について

福井大学講師　　廣 川　貴 朗

英語には、一見すると名詞句ではない主語（非名詞句主語）が生起し、動詞と一致を示すことが知られている。

That the march should go ahead and that it should be cancelled have been argued by the same people at different times (McCloskey (1991: 564))

先行研究において非名詞句主語の意味と単数・複数一致との間に相関があることが指摘される一方、範疇により単数・複数一致を許さないことが指摘されている。

Arriving early, meeting Bill, and getting a good seat seems/*seem to be what John wants. (Chomsky (2021: 31))

本発表は、等位接続された動名詞句・不定詞節主語が単数・複数一致を示し、意味解釈が等位接続された非名詞句主語の一致を左右することを示す。

# SYMPOSIA

## 文 学 部 門

## イギリス・ユートピア小説再考


司会・講師　東北学院大学教授　泉　順子
講師　福島大学教授　川田　潤
講師　法政大学准教授　小澤　央
講師　フェリス女学院大学非常勤講師　玉川 明日美


本シンポジウムでは 19 世紀〜21 世紀のイギリス・ユートピア小説（Samuel Butler, Elizabeth Gaskell, Charlotte Haldane, Aldous Huxley そして Kazuo Ishiguro の作品）を再検討する。ユートピア小説というジャンルは、より良き世界への希求と熱望が人類の想像力と掛け合わされて生まれたものだが、20 世紀には「アンチ・ユートピア」「ディストピア」という対義的な概念をもつジャンルも派生した。しかもよくよく検討してみると必ずしも描かれた世界が完璧な理想郷とは断定できない「ユートピア」すらある。このような事情から本シンポジウムのタイトルにある「イギリス・ユートピア小説」の範疇にはアンチ・ユートピアとディストピアの要素を含む作品も含まれている。

公共領域や公共圏を常に新しい角度から再構築しようと試みるユートピア小説ならではの批判的探求と想像力を再検討しつつ、このジャンルのもつ遊戯性についても触れてみたい。脈々と続いてきたこのジャンルの歴史と伝統をユートピア小説の担い手は互いに意識し、呼応しながら創作し続ける。各講師が取り上げる作品同士を結ぶ点と線について話し合う時間も設けてみたい。

### 記憶と意志 ――『エレホン』と近代の裂け目


川田　潤


小説だけでなく、論説、絵画、音楽など多分野にまたがるテクストを生み出したサミュエル・バトラー（1835-1902）の『エレホン』（1872 年）は、一般には（諷刺的）ユートピア小説と位置づけられている。しかし一方で、この作品にはディストピアやメタ・ユートピア的要素も認められる。このような『エレホン』を読み解く手がかりとして、バトラーがさまざまなテクストにおいて行ってきた、近代における「記憶」や「意志」と Soul／Mind／Body（魂・心・身体）の関係性の再検討を通じた「近代的主体」の枠組みの問い直しを参照することが有効かもしれない。記憶や意志といった主体の根幹（とされてきたもの）を疑うことは、近代リベラリズムの価値そのものを批判的に再検討することであり、それはまた（後期）資本主義を相対化することにも繋がる。こうした視点から『エレホン』を取り巻く思想的・社会的コンテクストを読み直すことは、現代において＜ユートピア／ディストピアを語ること＞の意義をあらためて問う試みにもなりうるだろう。

## ディストピアの反逆児
## ——Charlotte Haldane の *Man's World* と Aldous Huxley の *Brave New World*

小　澤　　央

Charlotte Haldane の *Man's World*（1926）は、Aldous Huxley の *Brave New World*（1932）に影響を与えたユートピア／ディストピア小説として概説書等で言及されてきた。しかしこれまで両作品が詳細に比較されることは殆どなかった。本発表は、これらの小説における設定、キャラクター、ストーリーの異同に注目し、二人の作家の伝記的事実や同時代の文化的・政治的文脈との関係で考察する。

両作品とも、科学者が支配的地位を占め、生殖に重点を置きつつ国民を序列化した、男性・白人優位の全体主義国家を予言している。二人の主人公はともに、理性より感性、科学より芸術や信仰、従属より自由を重んじる「時代遅れ」の異端児であり、セクシュアリティ的にあいまいな面を持つ青年でもある。彼らは体制に反旗を翻し、ついには自ら命を断つ。

本発表では、*Man's World* と *Brave New World* の比較を通じて、Haldane と Huxley が抱いていた科学への期待や懸念を明らかにするとともに、両作品の微妙な差異の背後にある作者のジェンダー、民族的・文化的属性、そして執筆当時の社会情勢へと迫りたい。

## 騎士ガウェインに託された「理想」と「失敗」
## ——中世騎士道ロマンスからカズオ・イシグロまで

玉川　明日美

カズオ・イシグロの *Buried Giant*（2015）の中で描かれるブリテン島は、異民族間の闘争が忘却の霧でもって収められ、一定の平和を享受する停滞した社会とされている。この忘却の霧を思想統制の比喩とみなし、その支配下にあるブリテン島をユートピアの類型と捉えることも可能かもしれない。本研究においては、国家や民族統一の象徴として作品に取り入れられたアーサー王と、その治世や秩序の守護者として描かれる騎士ガウェインに着目する。現代まで、アーサー王と円卓の騎士は「騎士道」の理想の体現者として、繰り返し文学作品の中で描かれてきたが、そうした箔付けは中世の騎士道ロマンスの隆盛の中で特に行われてきた。「冒険」の名のもとに宮廷から派遣される騎士たちを通して各所にアーサー王の影響を及ぼし、ブリテン島に騎士による中央集権的な国家を築く、という主題を描く中で、騎士は「秩序」の表象として描かれた。一方で、円卓の騎士の一人、ガウェインは美徳を重んじるがゆえに人間的不完全性を露呈する「失敗」を経験する、という役割を負わされる傾向にある。アーサー王による秩序の執行者でありながら、同時にその限界や不完全性を示すガウェインの存在は、ある種の理想国家のモデルの一つとして利用されてきた「アーサー王による理想のブリテン島」に文学者や読者たちがどのように相対してきたかを探る上で重要だといえる。中英語ロマンスの *Sir Gawain and the Green Knight* から *Buried Giant* に至るまで、アーサー王や騎士ガウェインという存在が、英文学史上、「理想」を描くうえでどのように構築され、醸成されてきたのかを検討したい。

## *Cranford* ――女性・ユートピア・手工芸

泉　　順　子

*Cranford*（1853）は Elizabeth Gaskell による友愛と相互扶助の精神に満ちた（比較的年齢層の高い）女性たちのユートピアである。本発表では、ユートピア的作品は常に歴史のなかにあり、理想とする生活の在り方がその作品が現れた同時代の現実によって影響を受けるものであるということを前提に、18 世紀後半から 19 世紀にかけての文化的・社会的文脈とこの作品を関連づけながら *Cranford* に描かれる手工芸品を検討し、Gaskell のリアリズムの先にある社会ヴィジョンを考察してみたい。

Cranford では「つまらないものを有効に使う」ことが勧奨され、身の回りにある素材を使って手工芸品がつくられている。新たにここの住民となった Captain Brown がわざわざ木製の石炭シャベルを作り、それを Miss Jenkyns に贈呈するのは、この共同体の一員として認めてもらうための、いわば儀式のようなものであると解釈できる。

過去と現在というふたつのときが流れるこのユートピア的共同体において、無名の女性たちがつくる品々は時空間を超えて Cranford に関わるあらゆる人々をつないでいく。女性ならではの経済的・環境的意識がいかにして工業化による疎外と搾取に抵抗し、利他の精神でもって理想の共同体を築こうとしたのか。本発表では作品を貫く草の根的な意識改革を手工芸品の描写を通じて検討してみたい。

# 英語学・英語教育部門

## On Merge and Its Theoretical Issues


| | | |
|---|---|---|
| 司会・講師 | 宮城教育大学准教授 | 戸　塚　　将 |
| 講師 | 元東北学院大学教授 | 阿　部　　潤 |
| 講師 | 明治大学教授 | 石　井　　透 |
| 講師 | 東洋大学教授 | 後　藤　　亘 |
| コメンテーター | 横浜国立大学非常勤講師 | 宗　像　　孝 |


本 SYMPOSIA は、生成文法における「併合（Merge）」をテーマとして議論を行う。併合は人間言語の構造構築の唯一の演算操作であり、2 つの要素を入力として組み合わせて新たな要素を作り出す操作である。併合の適用形式としては外的併合（External Merge）と内的併合（Internal Merge）の 2 種類が理論から許容されるものとされている。この適用形式の制限や併合自体に課される制約、併合が作り出すコピー（Copy）などについて議論が盛んに行われている。本 SYMPOSIA では、各講師が併合に課される最小性条件（Minimality Condition）について、併合自体をどのように演繹的に導くかについて、そして、併合とコピー形成（FormCopy）との関係について発表する。これらの発表を通して人間言語の本質に迫れればと思う。最後にフロアを含めて全体で活発な議論を行いたいと思う。

## A Phase-Free Syntax and Two Kinds of Minimality

阿　部　　潤

本発表では、フェイズ理論の代案として提唱された Abe (2016) の Search and Float 理論を支持する議論を展開することを目的とする。この理論の最大の特徴は、フェイズの概念を排除する代わりとして、二つの最小性条件、即ち Minimal Search と Minimize Chain Links を仮定することにある。本発表では、Branan and Erlewine (2024) や Keine and Zeijlstra (2025) が議論する“A’-probing for the closest DP”に関わる現象を取り上げ、これらの現象が Search and Float 理論で仮定された二つの最小性条件によってより良く説明できることを議論する。

## Reconsidering Merge Theory: Conditions, Consequences, and the Boundaries of Form Set

石　井　　透
後　藤　　亘

本発表では、生成文法における基本操作である「併合（Merge）」に課される理論的制約を整理し、それが統辞構造の生成にどのような帰結をもたらすかを検討する。また、併合の前段階に位置づけられる Proto 演算「集合形成（Form Set）」との関係にも着目し、両者の役割分担と理論的意義を明らかにする。具体的には、併合が作動する条件と、集合形成がどのような要素に関与するかを精査し、理論的整合性および経験的根拠の両面から、統辞理論における併合と集合形成の位置づけを考察することを目的とする。

## On Merge, Copy, and FormCopy

戸　塚　　将

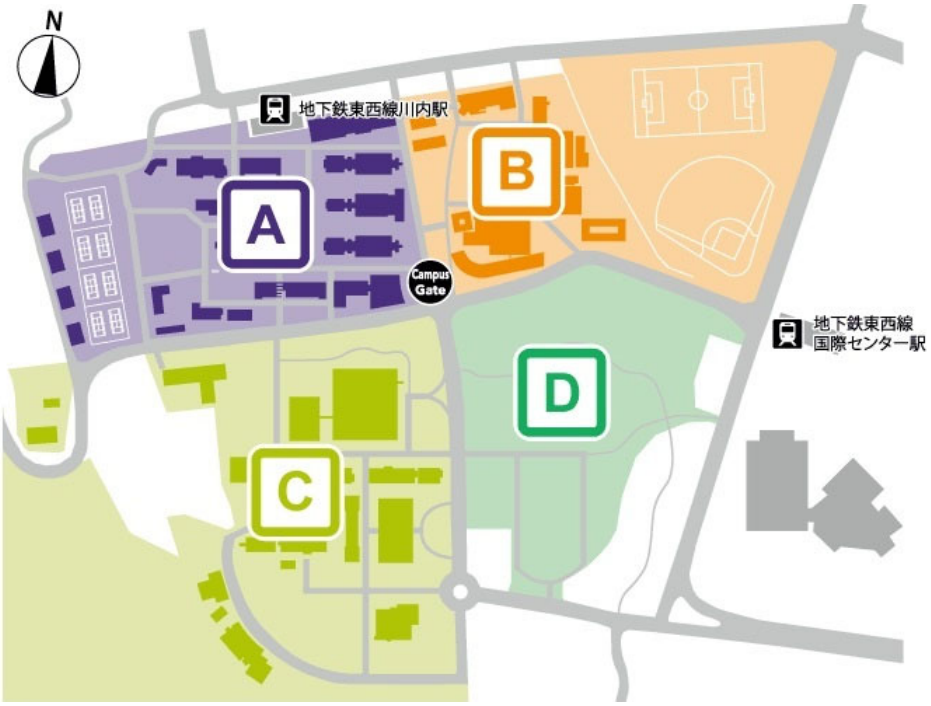
本発表では、近年の生成文法における併合（Merge）とコピー（Copy）の関係を整理し、Chomsky (2021) で提案されたコピー形成（FormCopy）がもたらす理論的な帰結を検証する。また、宗像（2024）のコピー形成の議論も踏まえ、従来、内的併合（Internal Merge）に組み込まれた形で形成された統語対象物（Syntactic Objects）のコピーの実態を再考し、コピー形成による説明が現在の生成文法における極小主義が目指す真の説明という目標にどのような役割を果たすのかを考察する。

## ○大会会場（東北大学川内南キャンパス 文科系総合講義棟）へのアクセス

（仙台市街外略地図）

JR 仙台駅より仙台市地下鉄東西線「八木山動物公園」行き乗車

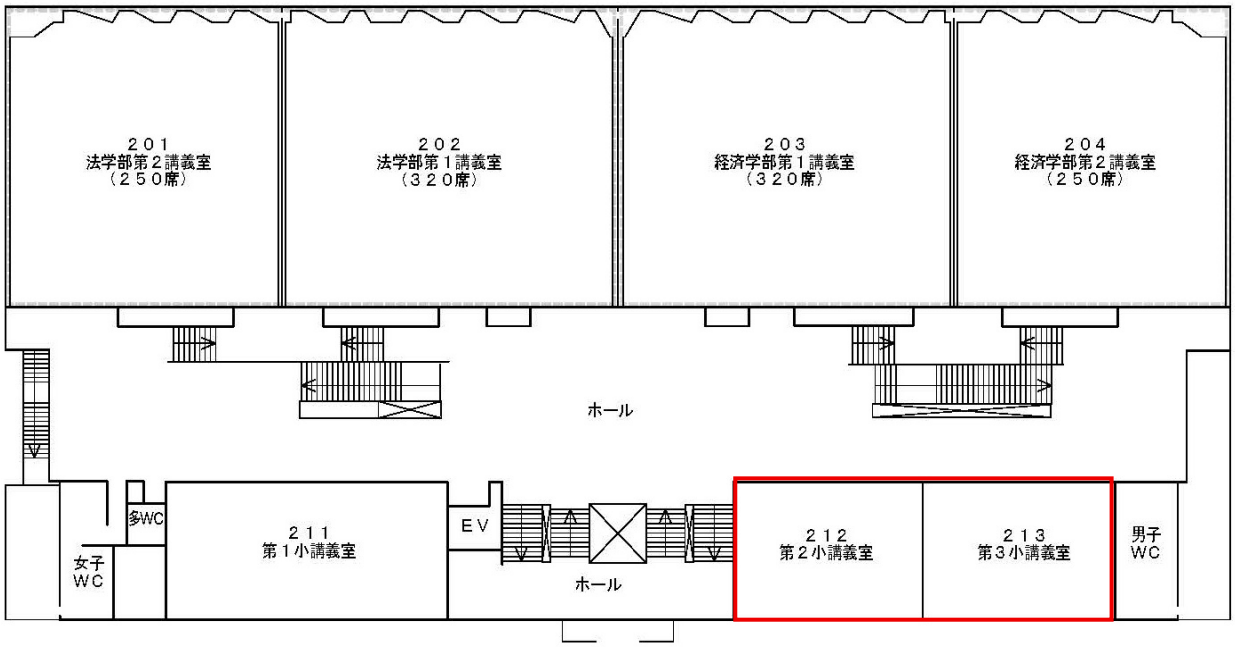
「川内駅」下車（約 6 分、210 円）、徒歩 5 分




（川内キャンパスマップ：川内南キャンパス 文科系総合講義棟は C エリア）

（川内南キャンパスマップ：文科系総合講義棟は C19 の建物）

〇施設平面図（文科系総合講義棟 2 階）




・第 2 小講義室（理事会、開会式、文学部門）

・第 3 小講義室（英語学・英語教育部門）

＊建物 1 階にコモンスペースがあり、ご休憩等にご利用いただけます。